

小山和伸 著

『無知と文明のパラドクス—複雑系人間社会への  
ハイエク・アプローチ』〔神奈川大学経済貿易研究叢書第28号〕

(晃洋書房)

灘山 直人

人類が地球上で繁栄してきたのはその優れた知性のおかげである、というのは通説であろう。つまり、これまで人類が築いてきた様々な文明というのは、その全知全能の知性に依るところが大きいと考えることができる。しかし本書の著者はこれを疑問視し、むしろ文明の発達が人間の無知から始まり、無知なりの試行錯誤の中から生まれてきたと考える。そして、これにつき政治や経済、組織といった異なる領域を横断して多面的にその論を展開したのが本書である。

本書は6つの章から構成されている。第一章「文明の発達プロセス」では、本書の中心的議題である文明発達と無知につき述べられている。著者はH. A. サイモンなどオーストリー学派の説を用いて人間の限界合理性を説明したうえで、それがゆえに人間は最適解を先駆的に用いることができず、試行錯誤のなかで文明を築き上げてきたと論じている。そして、その試行錯誤の中で偶然に出くわした成功体験を模倣しあうなかで、様々な亜流の文明圏を形成してきたと論じている。さらに各々の文明圏のなかで人々の分業が進んでいき、各人が専門分野に特化していくことで他分野に関する無知がますます促進されてきたと説明している。

以上のような論を具体的な文明発達の例とともに示したのが第二章「危機がもたらす文明の変革」である。著者は最初に農牧畜文明の発達に着目する。そして人類の狩猟採集生活から農牧畜文明への移行は、必ずしも誰かが農牧畜生活の仕組みを設計してできたのではなく、むしろ深刻な飢饉を乗り越えるべく人々が試行錯誤をした結果起こってきたものではないかと推測する。次に著者は工業化文明の発達に着目する。蒸気機関の発明から本格化した工業化は、核となる技術の偶然的発明から始まり、それをベースに試行錯誤した過程を経て拡大していったと説明している。そして、この先進国の工業化を後発国が独自に模倣するなかで様々な文明圏が形成されてきたと説明する。さらに著者は情報化社会の発達に着目する。これは人々が工業化の結果生み出されてきた様々な問題に直面し、これを何とか乗り越えようと試行錯誤していく過程において、偶然起こった技術的ブレイクスルーを取り入れることで発達したと説明する。

このように著者は文明の多様な発達を偶然の発見および模倣による試行錯誤によって説明してきたが、次に著者は第三章「コスモスとタクシス」のなかで、E. ハイエクの論を参照しながらこの文明発達の社会的仕組みを論じている。ハイエクによれば、人間社会は自的で内生的な秩序であるコスモスと、人工的で外生的な秩序であるタクシスという2つの秩序によって形成されている。前者の秩序は人々が暗黙のうちに共有しているものであり、必ずしも明瞭ではない。一方

で後者の秩序は意図的に設計された組織や建物に見られるように、合理的であり明瞭になっている。人間社会の構築を説明する際に、タクシスのみに着目して人々の理性による意図的な設計の結果と捉えるのは、分かりやすい考え方だが現実的ではない。なぜなら人間社会にはコスモ的な不明瞭で暗黙の秩序が必ず存在し、一定の役割を果たしているからである。著者はこの説明を補完すべく、バーナードの組織論を引用する。すなわち、ある特定の目的に基づいて設計された公式組織は、これを支えるコスモ的要素を多く含む非公式組織と調和しながら共存するものであると説明する。

次に著者は第四章「計画経済と自由競争の限界」にて、この論を経済学に展開していく。まず著者は計画経済を取り上げ、政府がタクシスに基づいて数論理的な手段をもって過不足なく需要と供給の均衡を維持させることは難しいと説明する。これはコスモ的な暗黙の秩序が必ず存在し、計画を狂わせるからである。さらに著者は古典派および新古典派経済の論を取り上げ、各人の利潤動機を中心にしたタクシスに基づいて市場取引を設計しても、やはりコスモ的側面が存在することを述べる。典型的な例は消費の模倣行動であり、消費者は無知であるがゆえに成功している消費モデルを模倣しあう中で暗黙のルールを形成していくのであると説明する。

続く第五章「自由主義と企業家精神」で著者は文明発達プロセスに立ち戻り、そのプロセスの契機となる偶発的成功に焦点を当てる。先に書いたように、人間の合理性には限界があり、すなわち高い不確実性を伴う意思決定において人々は全ての選択肢を並べてみて最適解を選び出すようなことはできず、むしろたまたま思いついた満足できるレベルの代替案を選ぶことが多い。ここで著者はオーストリー学派の論を引用し、この偶発的な意思決定のなかで、イノベータという少数の異質で特殊な人間の存在に触れる。著者はシュンペータの論を参照し、イノベータが企業家精神と呼ばれる冒険的な事業開拓力を持っている少数の特殊な人であると説明する。イノベータは世の中一般の常識に捉われずに未知の領域に対して挑戦するが、この中で偶然生まれた斬新なアイデアによる成功が文明の発達に大きく寄与するのである。

終章「天才が文明をつくるのではない」で著者は、文明発達のプロセスにおける少数の異質者の重要性を説くと同時に、実際には異質者の成功を模倣する大多数の人々の試行錯誤も重要である点を強調している。この大多数の無知な人々が不確実な現実と直面して他者の成功を模倣するなかで挫折を繰り返しつつ前進する努力がなければ、新たな文明は必ずしも発展していかないのだと述べている。

以上が本書の内容である。本書の主題が主知主義に対するアンチテーゼである以上、その背景にあるのは哲学的視点に他ならない。知識とは何か。デカルトの二元論に見られるように、知識とは人間と切り離されて客観的に存在し得るものであるのか。あるいはポラニーの論に見られるように、知識とは本来人間の主観を通して暗黙的に存在するものであり、形式的な知識はその一部にすぎないのか。これは社会科学の探求に従事する者にとっては永遠の問いであるが、著者は後者の立場を取っている。本書でそれはハイエクの示したコスモとタクシスという複眼的な考え方を通して語られている。著者も述べているように、我々はいづれ物事を単純化しがちであり、これは社会科学によらず実務者もそうであろう。もちろんタクシス的に単純化された法則やフレームワークを利用することには一定の意味がある。例えば複数の人々の間で物事を整理して共有し、一定のコンセンサスに導くことが容易になる。同時に、我々は常にこのアプローチの限界を思い知る。単純化された法則を活用する際には各人によるその法則に対する解釈を伴うが、こ

ここで多かれ少なかれコスモス的な各人の嗜好や思惑が入り込むのが現実であろう。そのため、より深いレベルでの暗黙的な共通理解がなければ、組織を維持していくことは難しい。私の研究領域である国際ビジネスにおいても、例えば企業の海外進出に関する意思決定を分析するためのフレームワークは存在する。一方で、企業は必ずしもフレームワークを用いて進出国や進出方法を分析的に割り出しているだけでなく、実際には偶然の出来事からある国でのビジネス機会を意識することもあるだろう。また様々な意見を持った人が試行錯誤しながら海外進出に関する合意形成をしていく側面も無視できない。このような進化論的な視点は本書に通じるものがある。

ここで本書の読者である私は1つの疑問に行き当たる。著者は無知による文明発達およびそこに内在するコスモス的秩序の重要性に関する自らの論を、本書にて形式的な文章を通して読者と共有するにあたり、タクシスのな、すなわち意図的に設計した明瞭な枠組みに落とし込まざるを得なかったのではないかという点だ。ところが、本書のなかにはこの矛盾を回避する仕掛けが十分に盛り込まれているのだ。著者はその知見を論じるにあたり、大小様々な非常に分かりやすい事例をふんだんに用いている。無知からの試行錯誤を説明する際にはアイスクリームの歴史を紐解き、コスモスとしての習慣を説明する際には日本の食文化の例を用いている。また自由主義と全体主義を説明する際には、家族による潮干狩りの例を用いている。これらは、著者が長年の研究生活のなかで本テーマを考えながら試行錯誤する過程で少しずつ蓄積していった結晶であろう。このような事例を多用することで、著者は単にその知見を単純化してタクシ的に読者に提供するのではなく、読者が個々の興味や置かれた環境に応じて自分なりに暗黙的な知見を紡ぎ出す素地を提供しているのだと感じる。だからこそ、本書は社会科学の研究者や学生のみならず、幅広いフィールドの実務者にとっても、あらためて自分なりに社会を考えなおす機会を与えてくれるのである。